
シノトキ

ナガス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シノトキ

【Nコード】

N3516V

【作者名】

ナガス

【あらすじ】

これは、死を集めた短編集。美しかったり、醜かったり、乱暴だったり、優しかったり。意味があったり、無かったり。沢山の死を集めた、死のお話達。

シノイチ（前書き）

はじめまして。「シノトキ」の作者、ナガスです。

この小説は、沢山の死を集めた短編集です。わざと言葉足らずに表現している場面が多々あり、それは作者の意図している部分なので、読者様ご自身の頭で、補完してください。

中には、胸糞悪くなるお話もあるかと思えます。胸が熱くなり、締め付けられる思いをするかも知れません。

読み終わった後、ボーっとしてしまったり、思考がまとまらなくなったりする可能性もあります。

しかし、当方は一切の責任を取るつもりはありませんし、読者様にそのような症状が起こった場合、それはこの作品の成功を意味するモノなので、嬉しく思う所です。

是非とも、思い悩んでください。

それでは、沢山の死を、ご堪能くださいませ。

シノイチ

彼女が目を覚ましたその場所は、自室では無かった。

わずか六畳ほどの小さな個室で、明かりと言えば白熱電球のみ。窓も無く、時計も無い。

じめつとした空気が体に絡みつき、彼女に不快感を与え、さらに床に落ちている腐敗した猫の死体が、強烈な臭いを放っていた。

この場所に監禁されて、三日目。普通ならば気が狂っている所だが、彼女は冷めた表情で猫の死体を見つめており、取り乱す事も、表情を曇らせる事も無い。

よほど強い精神力を持っているのか、それとも、もはや狂ってしまっているのか。

彼女がしばらく猫の死体を見つめ続けていると、この部屋の鍵を外す音が聞こえ、視線を扉へと移した。ガチャというノブを回す音と共に、彼女は自身の体を強張らせる。

古い建物特有の、キイという扉を開く音と共に、大きな瞳を持つ、やせ細った男が、顔をのぞかせた。

彼女と目が合うと同時に、ニヤリと笑いかける。

その表情は、笑顔と呼ぶには、あまりにも薄気味悪いものであった。

「元氣？」

男は声を発した。

その声を聞いて、彼女は眉間にしわを寄せる。

「あああつ！ 殺す！」

彼女は手錠で拘束されている両腕をガチャガチャと鳴らし、暴れてみせた。

しかし、膝を折られている両足では、立つ事もままならない。じたばたと暴れているその姿は、男に死に掛けの虫を連想させた。

「俺は、殺されない」

ケラケラと笑いながら、男は部屋の中へと入ってきた。それと同時に、彼女の胸の中には男に対する恐怖が、強く沸いてくる。

口では強がりつつも、彼女にとってこの男は、自分の生死を決める権限を持った、神そのものである事に、彼女も気づいていた。

「今日は、これ」

男は右手に持っていたものを、彼女の目の前に差し出した。

「これ、どうやって殺そうか」

ニタリと笑う男の表情に、彼女が恐怖するのは、当然の事だろう。男が右手に持っているものは、どう見ても、目が開いて間もない、生まれたばかりの子犬だった。

穢れの無い、無垢な瞳が、彼女と目を合わす。

「これ、どうやって殺そう？ 解剖してみる？」

「あんだ、狂ってる」

男は彼女の言葉を聞いて、より一層、笑みを深めた。男にとってそう言われる事は、暴言でも何でも無く、ほめ言葉なのだろう。

「はは。嬉しいなあ。だけど俺は、狂ってないよ」

男は子犬を高らかに掲げる。

「今に、わかる」

「やめ！」

彼女が声を発すると同時に、男は大きく口を開き、そして、子犬を思い切り、地面へと叩きつけた。

バシンという音と共に「キャン」という小さな悲鳴が聞こえ、自身の体をバウンドさせる。

そして、彼女の近くに、転がった。

「ひっ……！」

子犬は、口から少量の血を流し、右目からは眼球を飛び出させ、ピクピクと痙攣している。

身動きの取れない彼女は、子犬の変わり果てた姿を、ただ見つめ

た。

「あ、やばい。死んでないね」

男はそう言くと、右足を上げて、子犬の上へと持っていく。

「駄目！ 殺すな！」

「なんで？ 今、すげえ苦しいと思うよ」

男はそう言くと同時に、勢い良く、足を下ろす。

ブジュという音が、彼女の耳まで届き、男の足の下から染み出ている血液に、視線を奪われていた。

「あ……あ……なんて、事……」

「見てられないなら、視線を逸らせば？」

男は子犬を踏みつけたまま、その場にしゃがみこみ、彼女の顔を覗き見る。

それでも彼女は、男の足元から、視線を逸らす事が出来ないでいた。

「視線を逸らさないのは、興味があるからじゃないの？」

男はニヤリと笑い、彼女の顔に手を触れる。

彼女は同時に、男の顔を見た。

「素直になれよ。死に、興味があるんだろ？」

シノ二

こうしてビルの上の縁に立ち、地面を見下ろしてみても、俺にはなんの感情も湧いて来なかった。

振り返ったとしても、何一つ成し遂げて来なかった人生。

どうやら俺は、その人生を終わらせる事に、躊躇いが無い。

ジリと、死へ歩み寄った。

もう半歩、足を踏み出せば、死へと到達出来る。

辛いという感情や、苦しいという感情の無い世界は、もうすぐそこ。

金網から手を離し、両手を広げた。

強く吹き付ける風に、自分の身を捧げた。

上空で吹く風は、容易く俺の体をさらった。

そしてそのまま、俺の両足は地面を離れた。

宙を舞っている最中、俺は考えた。

死後の世界は、あるのだろうか。

もし死後の世界があるのだとすれば、俺は一体、どういった扱いを受けるのだろうか。

仏教では死への過程は関係無く転生するし、キリスト教では許されない行為として、地獄に落ちる。

もし転生するのだとすれば、今度はお金持ちの家庭に生まれる。もう二度と、金で苦労はしたくない。

もし地獄に落ちるのだとすれば、早いところ理性を失ってしまいたい。地獄の苦しみなんて、弱い俺には耐えられそうも無い。

どちらにしても、地面に落ちる瞬間は、とてつもなく痛いのだろう。

そう考えると、少し嫌になる。

何故、死には、痛みや苦しみが伴わなければいけないのだろうと、考える。

痛みなら今まで、散々耐えてきた。苦しい現実も、超えてきた。俺の容姿が醜く、なおかつ親が借金まみれだからと言っ、理不尽な理由で苛めを受け、その都度に与えられる、心の痛みも、苦しみも。体の痛みも、苦しみも。

全て耐えてきたと言っのに。

それなのに、死んでしまうその瞬間にさえ、痛みが与えられるなんて、酷い話だ。

しかしきつと、この世は、そう出来ている。

痛みに耐えなきゃいけない人間は、一生、耐え続けなければならぬ。

俺の生涯が、それを証明していた。

良くなる兆しなんて、これっぽっちも、無かった。

だから俺は、今、死ぬ。

たとえ死ぬ瞬間、死ぬほど痛いのだとしても。

生き続けて、これからも痛みや苦しみを耐え続けるよりは、マシ。

死とは、痛みが救いだ。

誰からも救われる事の無かったこの俺が、唯一甘える事の出来る相手が、死。

死は、少なくとも俺にとっては、優しい。

全てのものに平等に存在してくれているだけで、救いだ。

人間扱いされて来なかったこんな俺でも、死だけは俺に死ぬ事を許してくれる。

そして死は、俺を苛めてきた奴等に対する願いも、絶対に果たしてくれるのだ。

だって人間は、いつかは必ず死ぬのだから。

俺の願いは、いずれ必ず、果たされる。

もうそろそろ、地面に到着する。

あと数秒で、俺は死ぬ。

ようやく、生から開放されるのだ。

どれほどの間、この瞬間を待ち続けていた事か。

辛いという感情も、苦しいという感情も。

あまり味わった事の無い、楽しいという感情も、嬉しいという感情も。

何一つない、世界へ。

今、到達する。

「いやだ！」

誰かの叫び声が、聞こえてきた。

「死にたくない！」

また、聞こえてきた。

「しに」

最後に聞こえてきた音は、今まで聞いた事の無いほど大きな、バチンという音だった。

シノサン

神より与えられた生を、今まさに終えようとしているアベルの瞳から、光が失われようとしていた。

アベルが最後に見た景色は、兄カインの、怒りとも歓喜とも取れる、表情。

その表情は、羊飼いのアベルにとって、信じられないものだった。アベルは羊を殺す際、神へと祈りを捧げ、罪を受け入れ、命に感謝をしながら殺していたからだ。

「か……カイン」

刺された腹から、大量の血が流れ出る。

痛さよりも、脱力感のほうが大きく、アベルは膝をつく。

「貴様、サタンに操られたか……？」

全身の力が腹に開いた穴から抜けていく感覚を覚え、アベルは自らの傷口を押さえる。

しかし、アベルの力の源である血は止まる事が無く、地面へと垂れ、大地へと染み込んでいった。

「サタンだと？ いいや違う。これは俺の意思だ」

「……意思？」

カインは手に持っている、尖った石を、天高く振り上げた。

そしてアベルの顔を見て、ニタリと笑う。

「そうだよアベル。俺はな」

アベルの顔目掛けて、石を振り下ろす。

尖った石はアベルの口へと入り、舌を裂き、喉をつぶし、命を奪った。

グルリと裏返ったアベルの眼球は、もはや光を失っている。

アベルの体はゆっくりと、うつぶせに倒れた。

カインはより一層、笑顔を深め、アベルの頭へと足を乗せる。

「俺は、貴様が憎かった」

人類が始めて、死を体験した瞬間だった。
そして、それを成したのは、他でもない、人間そのものだった。

「きさ……貴様だって、沢山の羊を、こ……殺してきたじゃねえか」
その日の夜、アベルの死体を隠し、自分の家へと戻ったカインは、
うなされていた。

寝付こうとしても、心臓が高鳴り眠れない。そもそも目を閉じたら、アベルの事を自動的に考えてしまう。

完全なる沈黙が恐ろしいものに感じ、カインは独り言を呟き続けた。

「俺は……これが始めての……殺した……お前に比べたら、どれほど軽い罪か」

カインは自分を正当化する。

「そうだ……お前の手にかかり、失われた命は数知れず……だが俺が奪った命は、たったひとつ」

カインの表情は、にやけていた。

言い訳を続ける事により、自分の正当性を導き出し、それに励まされているようにも、見える。

気分が晴れてきたのか、カインは横たえていた自分の体を起こし、瞳を大きく見開き、何も無い空間を凝視した。

「そうだ。気に病む事は無い。胸を張れ。俺は何も、悪くない」

カインはついに立ち上がり、大声をあげる。

「悪くない！俺は悪くない！」

カインのその声は、遙か彼方の地に住む、最初の悪魔であるリリスの耳まで、届いていた。

翌朝、土を耕す者であるカインは、何事も無かったかのように、畑を耕していた。

昨晚、一睡も出来なかったというのに、アベルの事を忘れるため、一心不乱に土を掘り返す。

「よお、カイン。頑張ってるなあ」

そんな時、神であるヤハウエが、カインに対して声をかけた。突然の出来事に、カインは思わず、体を硬直させる。

そして、全身から汗があふれ出るのを感じていた。

「あ……あ、はい。今度こそヤハウエ様にご満足頂ける品を献上したいと思い」

「そうかい、良い心がけだな。所で、アベルの姿が見えねえんだが、どこに行ったか知らないか。地上のどこにも居ねえんだけど」

カインはヤハウエの言葉を聞くと同時に、動悸が激しくなり、息をする事すらも困難になった。

「し……知りません……私は生涯、アベルの監視役ですか？」

カインは昨日、あれほど「自分は悪くない」と言い続け、その理論すらも構築したと言ったのに、嘘をついた。

つまりそれは、嘘をつく必要があった。という事。

カインの理論は、間違っていたという事の、証明でもあった。

その事に、神であるヤハウエが気づかない訳が無い。

「ふふふ……」

ヤハウエは笑った。

「ウソツキめ。私にも、自分の意思にも、嘘をついたな？」

神の顔は見えないが、この時のカインには、神の表情がしっかりとイメージ出来ていた。

それは、カインがアベルを殺した時の表情、そのままの顔だった。

シノヨン

エイコちゃんは、少し変わっていた。

女の子だと言うのに、お人形よりも昆虫を集めるのが好きで、オママゴトよりもサッカーを好む、活発な子。

性格は男勝りという訳では無いが、勝気が強く、勉強でもスポーツでも一番でなければ気がすまない、完ぺき主義者。

友達が多く、男女問わずに皆から好かれており、クラスの中心人物といった印象を、私は持っていた。

友達が多い訳でも少ない訳でも無く、勉強もスポーツも常に真ん中の成績を取っている私にとって、彼女は憧れのような存在。彼女が、輝いて見えていた。

ある日、私が一人で学校から帰宅していると、後ろから声をかけられた。

元気で明るく、力強い声が、私の名を呼ぶ。

「おーい、サエちゃん」

後ろを振り返ると、そこには大きく手を振る、エイコちゃんの姿が見えた。

エイコちゃんの家が私の家の近所にある事は知っていたのだが、エイコちゃんと私は特別仲が良い訳では無かったので、今まで一度も一緒に帰った事は無い。

そもそも、エイコちゃんが帰宅する際、周りには常に数人、仲の良い友達が居たので、人付き合いが上手では無い私は、その輪に入る事が出来ず、常に後ろから眺めているだけであった。

そんな人気者のエイコちゃんが、私の名を呼び、駆け足で近づいてくる。

嬉しくない訳が無かった。

「あ、エイコちゃん。今日は、一人なんだね」

「あはー。サエちゃんの後姿見えたから、一人で走って来ちゃった」
彼女はそう言い、私へと笑いかけた。

その瞬間、私はドキツとする。

「え？ どうして？」

「ん？ だあって、なんか寂しそうだっただもん」

彼女はおもむろに私の右手を握り、引っ張る。

「サエちゃんのおうち、私んちの近所なんだよね？ ちょーどいいじゃん。これからは一緒に帰ろうよ」

掴んでいる私の腕をぶんぶんと前後に揺らしながら、エイコちゃんは弾んだ声でそう言う。

彼女の屈託無い表情と有難い言葉は、私の心を奪うのに、十分すぎた。

「う……うん」

「ん？ なんか元気ないね？」

「ううん……嬉しいな」

私はエイコちゃんに向かって、笑いかける。

そうするとエイコちゃんは満足したようで、より笑顔を深めた。

楽しい時間は早く過ぎてしまうようで、片道三十分はかかる道のりが、あつと言う間の出来事のように感じてしまっていた。あと数十歩先に、私の家がある。

出来る事なら、もっとエイコちゃんと一緒に過ごしたい。放課後、一緒に遊んでみたい。

そう思い、遊びに誘うために口を開こうとしたその時、エイコちゃんは「あー」という、大きな声を出した。

「そーだサエちゃん。今日は天気も良いし、一緒に遊ばない？ 裏山に秘密基地があるんだー。ご招待するよ」

彼女はニコニコと笑いながら、私を誘ってくれた。

私がやるうとしていた事を、エイコちゃんに先にやられてしまい、驚く。

それと同時に、心がとても温かくなった。

エイコちゃんも遊びたがってくれている事に、凄く嬉しい気持ちになる。

「ねえ行こうよ。そんなに遠くないからさ」

彼女は握っている私の腕を、先ほどよりも激しく前後に揺らした。

「うん、行きたい」

「ホント？　じゃあランドセル家に置いたら、すぐサエちゃんの家に行くから、待っててね」

彼女は満面の笑みを浮かべそう言つと、私の腕を放し、駆け足で自分の家へと向かっていった。

その後姿を見て、私はとても幸せを感じている。

基本的にインドア派の私は、近所に山があると言うのに、行った事が無かった。

理由としては、虫が苦手だと言うのが大部分を占めている。

こうしてエイコちゃんと共に足を運んでみて、やはり山は好きになれそうも無い。耳元に虫の羽音がするだけで、声を出すほど驚き、鳥肌を立たせていた。

その度にエイコちゃんから「あはー」と笑われているが、その笑顔は嫌いじゃない。

私の事で笑ってくれる事は、なんだか嬉しく感じていた。

「ほら、あそこ」

エイコちゃんは、ブルーシートで作ったテントのようなものを指差した。

その大きさは、子供が三人中に入るとギュウギュウになってしまふほど、小さなもの。

しかしエイコちゃんは、誇らしげに「ようこそ、別荘へ」と言いながら、笑顔を深める。

その表情がとても、可愛らしく私の目に映った。

「ささ、どうぞー。一応ダンボール敷いてあるから、靴は脱いでね」

私はエイコちゃんに勧められるまま、ブルーシートのテントの入り口を開いた。

しかしその瞬間、私はあまりの異臭に「うっ」という、声を漏らす。

何の臭いなのかが解らず、私は思わずエイコちゃんを見た。

「ん？ どうしたの？」

エイコちゃんはどうやら、気にしていないようだった。

この臭いに慣れてしまったのか、それとも気付いていないのか。いや、気付かない訳は無い。この世のものとは思えないほどの、臭いなのだから。

「う……うっん。なんでもない」

私は無理やり笑顔を作り、本当になんでも無い風を装い、我慢しながらテントの中へと足を踏み入れる。

そして私は、見てしまった。

「え……」

テントの中には、沢山の虫の死骸があり、その上には、腐りかけの猫の死体が転がっており、その隣には、人間の赤ん坊が、居た。人形などでは無い。汚い毛布に包まれた、本物の、人間の赤ちゃんだった。

「あ……赤ちゃん……？」

私はかろうじて、それだけを言った。

「そうだよー。名前はチャキマルって言うの」

エイコちゃんは私の後ろから大きな声で、嬉しそうに赤ちゃんの名前を紹介する。

本当に、嬉しそうだ。声が弾んでいるのが、解る。

「チャキ……」

「うん。ちなみにそっちの猫ちゃんもチャキマルって言うんだけど、先週死んじゃったんだよね。だから新しいチャキマルを、昨日拾ってきたの。公園に居たんだー」

彼女の声から感じられるものは、純粹な「嬉しさ」だった。

それだけしか、感じられない。

「……もしかして、この虫の名前も、チャキマル？」

「うん。ぜえんぶ、チャキマルだよ」

彼女は靴を脱いで、テントの入り口部分で固まっている私を押し
のけ、中へと入る。

そして赤ん坊を拾い上げ、ダンボールの上へと腰を下ろした。

彼女の顔は、この上ないほどの、笑顔に見える。

「チャキマルー、お客さんだよ。サエお姉ちゃんって言うんだよ」

赤ん坊は、口を開き、手を伸ばした。

その姿に力は無く、生気すらも、ほとんど感じられない。

「チャキマル、今日は静かだよ。昨日はずっと泣いちゃってて、寝
かすつけるのに苦労したんだあ」

彼女の仕草や言動は、本当に無垢なものに見えた。

そして不思議な事に、まるで本物の姉弟のようにも、見えてしま
う。

つまり彼女に、悪意は無いという事。

「はっ」

「ん？ どうしたのサエちゃん。なんか顔色悪いよ？」

彼女は、私の顔を見た。

睨んだ訳では無い。ただ、見た。

純粹で綺麗な瞳に射抜かれ、私は動けない。

「犯罪だよ」と言おうとした口も、どうやら固まってしまった。

「ねえねえサエちゃん、これから一緒にチャキマルを育てていこう
よ」

彼女は元気良く、そう言った。

「なかなかカッコイイ子に育つと思うんだよねー。そうしたらサエ
ちゃん、旦那さんにしちやいなよ」

彼女の言葉は、本気だった。

「……うん、そうだね」

「でしょー？ 良かったねえチャキマル。サエお姉ちゃんが旦那さ

んにしてくれるってー」

明日には消えるであろう命を抱いて、彼女はいつまでも笑顔のままだった。

シノゴ

心を痛めて、初めて解る、自分の弱さ。

それを知った時の絶望感は、味わった人間にしか解らないだろう。人を貶め、陰口を叩き、笑みを浮かべるような人間が、ちょっとした事で精神科へと通うほど、現代人は弱い。

私はそんな人間たちに、引導を渡す仕事をしている。

数畳ほどの個室に、今日も患者が足を運ぶ。

私に縋るしか道が残されていない、哀れな患者だ。

今日の患者は、中肉中背の若者。髪の毛を赤茶色に染めており、見た目的には現代っ子のようなイメージを持たされる。

しかし中身は、とんだ甘えん坊だ。大学へ六年も通った挙句、結局単位が足りずに自主退学し、親が煩いからという理由で家を出、ギャンブルに明け暮れ、消費者金融からお金を借りまくった挙句、借金が返せなくなり、親に泣きつき、その後アルバイトを始めるも、人間関係で上手くいかず、数ヶ月、悪ければ数日で辞めてしまうという、いわば屑のような人間だ。

こういう人間は、まず危機管理がなっていない。仕事を辞めれば死ぬという状況にまで追い詰められたとしても、こいつは仕事を平気で辞めるのだろう。状況が把握出来ないのか、誰かが助けてくれる事を当たり前だと思っているのか。

そのくせ「自分は特別だ」と、本気で思っているから性質が悪い。

何一つ、成し遂げて来なかったくせに。

何一つ、頑張っ来なかったというのに。

何一つ、得てはいないというのに。

そして、その架空の自尊心と現実の狭間に立ち、弱音を吐きに来る。

擁護して貰うため、自尊心を守るために。

「先生……もう俺駄目だ」

椅子に着席した彼は、私に向かってそう言った。

彼と話するのはこれで五度目なので、お互い顔見知りのような状態になり、私のほうが年上なのだが、彼が敬語を話す事はもう無い。

「駄目じゃないよ」

私は彼の瞳を見て、言葉をかけた。

彼はすぐさま目を逸らして、地面を見つめる。ズボンを握り締め、口をへの字にしている彼は、照れているようにも見え、若いという印象を私に与えた。

以前から思っていた事だが、彼はあまり女性に慣れていないように思える。しかしそれも当然の事。誰がこんな男に構ってくれようか。

「だって俺、どの職場に行ってもものけ者にされちゃうし、仕事の覚えが悪いつて怒鳴られるんだ。それが怖くなってもう二年も引きこもってるし、駄目なんだよ、俺」

「カトウ君は、運が悪かっただけ。バイト先の環境が悪かったんだよ。それに今は、私の所まで足を運んでくれる。引きこもって無いじゃない」

相手の話を聞き、相手の事を肯定するというものは、精神科医の常套手段だ。それをするだけで患者は安心し、自分の存在に意味を持てる。使い古された方法ではあるが、薬や説教よりも、格段に効果期待できた。

しかし私の場合は、違う意味合いでこの方法を用いる。

相手の心をこじ開け、中身を見、一番弱い所を突付くための、道具。

「……だけど、居場所が無いんだ。家に居ても、親の視線が痛いし、人付き合いが下手で、職場でも迫害されて……俺の存在価値なんて、無いんじゃないかって」

彼は自身の頭を抱え、うつむいてしまう。

その際、私のスカートから伸びる両足を眼で追っていた事に、私は気付いていた。

彼に限らず、男という生き物は、どんなに追い詰められた状況であろつとも、性欲を忘れない。これは本能にすら刻まれている事なので、本人が好もうが拒否しようが、否応なしに存在しているもの。私を女として、意識をしている証明でも、あった。

私はニヤリと笑みを浮かべ、彼の側へと近づき、頭をなでる。

基本、患者との接触や、プライベートでの付き合いは禁止されているが、私はそれらのルールを、守った事は無い。

「居場所なら、ここがあるじゃない」

「……せんせえ」

私はより接近し、彼の太股へと手を乗せる。

それだけで彼は感じてしまったらしく、「あ」という声を上げた。「私がカトウ君の、居場所になるよ」

彼は頭を抱えていた手を離し、俯いていた頭を上げ、私の目を見た。

私も、彼の目を見る。

彼の目には、慈愛に満ちた表情をしている私が、映し出されているのだろつ、次第に涙を浮かべて、私へと抱きついてきた。

その瞬間、私は「きゃ」という、小さな悲鳴をあげるが、すぐさま彼の頭へと手を乗せ、なでる。

「せんせえ……！ 俺、もう先生無しじゃ……！ 俺……先生が……！」

私は心の中でほくそえんだ。

「うん。解つてる。今晚、私の部屋に来て」

この誘いを断れる男は、居ない。

この手の男を死に追いやる事は、とても簡単。

この世で唯一、自分を肯定し、自分を愛してくれている者からの裏切りが、どれほどの絶望に変わるかを、私は知っているからだ。

さて、どうしてくれるかと考えながら、ためらい傷で埋め尽くされた醜い手首を持つ左手で、彼の頭をなで続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516v/>

シノトキ

2011年8月5日03時21分発行